

2014年度自己点検・評価報告書(シート)

【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

＜大学＞

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	神学研究科
大項目	9 教育研究等環境 (研究科)
中項目	
小項目	9.0.4 教育研究等を支援する環境や条件は適切に整備されているか。
要素	教育課程の特徴、学生数、教育方法等に応じた施設・設備の整備 ティーチング・アシスタント(TA)・リサーチ・アシスタント(RA)・技術スタッフなど教育研究支援体制の整備 教員の研究費・研究室および研究専念時間の確保

II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 大学院(学部)図書室および大学院共同研究室を、院生会の要望も入れながら整備する。	→大学院(学部)図書室および大学院共同研究室の整備。	B	B	B	B	B
2. ティーチング・アシスタント(TA)、リサーチ・アシスタント(RA)の任用による教育研究支援体制を整備する。	→専門科目におけるTAの任用者数(2013年度までに1名以上)。特定プロジェクトへのRA任用者数(1名以上)。	C	C	C	C	B

☆

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 自治組織である「院生会」より例年5～6月に学修・研究環境改善に関する要望書が提出され、これをひとつの材料(資料)として環境改善へ向けての協議(研究科副委員長を通じて研究科委員会にて)を行う仕組みが確立されている。要望書は2008年度以降、継続的に提出されている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 「院生会」とは、履修登録制度に関する要望(セメスタごとの履修計画による登録:2009年度)、大学院共同研究室へのPC活用に関する要望(設置・聖書ソフトウェアの使用:2008年度、専用ギリシャ語フォント使用:2009年度)、研究計画に関する要望(手続き書類のWEB掲載:2013年度)などにおいて、互いのよき了解のもとに一定の進捗をみている。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 大学院共同研究室の施設利用について夕方の時間延長にも対応しているが、2009年度以降夜間の利用に関する要望も出されている。施設管理面での課題を洗い出しながら、そのようなニーズに対しても一定の方向性を見出す。	☆
		その他	☆

目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 2014年度から、学士課程における語学(英語)科目、入門科目、専門科目(古典語)に、大学院生をティーチング・アシスタント(TA)として採用している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 学士課程におけるTA採用は2014年度が初年度でもあり、授業での活用や評価について現段階でヒアリングは実施していないが、授業担当者、TA双方から情報を収集していく必要がある。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 採用初年度の状況を適宜把握の上、授業担当者およびTAへのヒアリングも実施しながら、まずは課題を洗い出すことに重点をおく。その上で学士課程における教育効果とあわせて、TA(大学院生)自身への効果も測定する。	☆
		その他	☆
備考			☆